

故郷喪失のポーランド文学

田中壮泰

ポーランドで「引揚げ」について考えるとき、重要になるのが、ポーランド語で「クレスイ」Kresy と呼ばれる土地です。もともとは「国境地帯」や「辺境」といった意味を持つ kresy が固有名詞化したもので、ドニエストル川からドニエプル川にかけてのステップ地帯を指しました¹⁾。しかし、時代ごとに、その国境の変動に合わせて、「クレスイ」の範囲も変化しました。日本語にするとすれば、「ポーランド東部国境地帯」とするのが適当です。かつてはポーランド領でしたが、第二次世界大戦後に領土から切り離され、現在はウクライナ、リトアニア、ベラルーシ、ロシアの一部に属しているこの地は、ポーランドにとって、日本の「外地」に相当すると言えるでしょう。

この地にポーランド人が移住を開始するのは、ポーランド王国が東方に領土を拡大する14世紀に遡ります²⁾。1596年にポーランド・リトアニア共和国が成立すると、さらに東方に領土が広がり、ポーランド貴族（シュラフタ）の支配のもと、先住民（のちのウクライナ人、ベラルーシ人、リトアニア人）は農奴化され、土地のポーランド化が進みました。しかし、18世紀末のポーランド分割以降、ロシアに併合されてロシア化が進められ、1918年のポーランド再建国の後、これまでのロシアの帝國的な同化政策を、ポーランドが国民国家の形で引き継ぐこととなります。つまり「クレスイ」とは植民地主義支配が連鎖した地域でした。

この地を描いたポーランド語の詩や小説は多く、それらをまとめて「クレスイ文学」と総称することもあります。古くはロマン主義時代に遡り、まだ「クレスイ」という言葉が定着していなかったこの時代に、のちの「クレスイ文学」のモデルとなる作品が次々と書かれました。その代表的な作品のひとつに、ミツキェヴィチの『パン・タデウシュ』（1834年刊）があります。ポーランド分割後のリトアニアの農村を舞台に、ナポレオンのモスクワ遠征が目前に迫るなか、祖国独立に向けてポーランド貴族が団結していくまでを、対立関係にある家に生まれた男女の恋を中心に描いた叙事詩です。

その冒頭で、語り手が、リトアニア（ポーランド語で「リトファ」）の土地に向けて、二人称（ty）で呼びかけながら、祖国喪失の悲しみを歌い上げていますが、これは分割以後のポーランド文学の再出発を告げるものであったと同時に、「クレスイ文学」の誕生をも告げるものでもありました。

リトヴァ^マ！ わが祖国！ 汝は健康にこそ似る
その価値をしみじみと知るのは、ただ
健康を失った者のみ。きょう華麗なる汝の美しさを
目に浮かべ、わたしは描き出す、わが焦がれる汝ゆえに³⁾

こうしてミツケヴィチ以後、クレスイ出身の作家たちが、『パン・タデウシュ』をお手本として、失われた故郷を描く作品を次々に発表していくことになるわけですが、しかし、「クレスイ文学」が本当に盛り上がりを見せるのは、戦間期になってからのことでした。

1921年のリガ条約によって、ヴィルノ（現リトアニアのヴァリニユス）ヤルヴフ（現ウクライナのリヴィウ）を含む「クレスイ」の一部（地図の色塗り部分）がポーランド領に帰属したことで、ヨーロッパにおける「地方文学」のポーランド版として、「クレスイ文学」は新たに注目を浴びることになります。その結果、戦間期のポーランドには、ブルーノ・シュルツやスタニスワフ・ヴィンツェンツなど「クレスイ」を描く作家が次々とデビューしました。ところが同時に、キエフやミンスクなど、戦間期にポーランド領から外された土地も「クレスイ」と呼ばれ続けており、この失われた故郷としての「クレスイ」を描いた作家も戦間期に登場しています。そのひとりにヤロスワフ・イヴァシュケヴィチがいました。



イヴァシュケヴィチの「引揚げ」

イヴァシュケヴィチは、日本ではカヴァレロヴィチ監督の映画『尼僧ヨアンナ』の原作者として、また、シヨパン研究者として、すでに紹介されていますが、まだ無名に近い存在です。ポーランドでも、第二次世界大戦後に『作品』誌編集長やポーランド作家同盟会長など、さまざまな要職についた大御所作家としては知られていても、「クレスイ」出身者としての初期の活動にも目が向けられるようになったのは、ここ数十年のことです⁴⁾。

イヴァシュケヴィチは1894年にキエフ近郊のカリヌィーク村で生まれました。父は砂糖工場の簿記係でしたが、その父が1902年に亡くなると、母方の親戚を頼って一家はワルシャワからエリザベートグラード（現ウクライナのクロピウヌィーツィクイイ）、そしてキエフへと、ロシア帝国の都市を転々としています。その後、キエフ大学に進学したイヴァシュケヴィチは、家庭教師で生計を立てながら創作活動を開始しますが、やがて、第一次世界大戦が勃発します。

この時期に、戦火と略奪を避けて、ロシアの地から多くの人々が、東から西へと「撤収」(ewakuacja) しましたが、第一次世界大戦が終結する直前に、キエフからワルシャワに「移住」したイヴァシュケヴィチもその流れに乗った一人でした。ただし、この時期はキエフもワルシャワもドイツ占領下にあったため、イヴァシュケヴィチ本人も1968年に出版した回想録のなかで「キエフにとどまる理由がない」⁵⁾ のでワルシャワに出発したと簡単に述べているように、両都市間の移動は、それほど困難を要するものではなかったようです。ところが、ワルシャワ到着後にポーランドが独立したことで、イヴァシュケヴィチは事後的に「祖国への帰還」

(repatriacja) を果たすことになりました⁶⁾。

ただし、この時点でのイヴァシュキェヴィチには、故郷に帰る選択が将来的な可能性としてまだ残されていました。とくに1919年にポーランド・ソビエト戦争が勃発したことで、その可能性は一気に高まります。

イヴァシュキェヴィチの最初の長編小説『簿記係の息子ヒラリー』（1923年刊）が描くのも、まさにこの時期に、故郷ウクライナへの思慕を抱きながら、ワルシャワで文学活動を行っている駆け出しの作家の経験でした。この小説は、独立直後のワルシャワに、近郊の農村から上京したばかりの若者ヒラリーが、作家としてデビューしてから挫折するまでの数年間を描いたものですが、その友人である語り手の「わたし」を通じて、当時のワルシャワの町並みを浸食するように押し寄せてくる、ウクライナの大平原へのノスタルジーが語られています。

今日のような雨模様の日に窓の外を眺めているとき：屋根のブリキ板を雨が優しく叩く音を聞いているとき、四季折々のかつての雨の残響が私に到来する。あのいにしへの街、かつてのおまえの幻が。（中略）おまえ、偉大なるキエフよ（中略）。この上なく甘い街、私の青春の街、このような夜にはワルシャワでおまえを見たいものだ⁷⁾。

ポーランド・ソビエト戦争の時期に、ウクライナから届けられる、キエフ奪還に向けて東進するポーランド軍の知らせは、語り手の「わたし」にとって、故郷が近づいてくる可能性に満ちたものでした。いわば、『簿記係の息子ヒラリー』は、ミツキェヴィチをその出発点とする「クレスイ文学」の伝統にきわめて忠実な作品であったと言えます。

同様のことは上述の回想録からも読み取ることができます。当時を回想しながら、イヴァシュキェヴィチは、次のように語っています。

あれは忘れもしない、あの年のとても美しい四月のことだった。異常な天候とともに、歴史的異変がポーランドに降り掛かり、ウクライナから到来したあらゆるもののおかげで、帰還の希望が輝き始めたのだ（中略）。子どもの頃に母から、乳母から聞いたこと、後年に様々な本で読み知ったこと、すべてが思い出された。ユリアン・スウォヴァツキがオデッサの砂漠を通過して、リマンの湯治場に赴いていた時代、その一世紀も昔のロマン主義的なウクライナの虚像が目の前に立ち現れたのだ⁸⁾。

故郷喪失者としての自らの境遇を、ポーランド・ロマン主義の伝統に重ね合わせて語るイヴァシュキェヴィチには、たとえば後藤明生や小林勝など、日本の「引揚げ文学」を読む時に感じられるような植民者としての意識は、微塵もなかったように思われます。

しかし、他方で、イヴァシュキェヴィチには「クレスイ文学」の伝統からの距離をも読み取ることができます。

イヴァシュキェヴィチは現在では小説家として有名ですが、詩人として出発しました。初期の詩にはウクライナを描いたものが多く、たとえば、詩集『ディオニュソス祭』（1922年刊）に収められた「メランコリア」という詩は、ウクライナの木々や草花に向けて「おまえ」と呼び

かけながら、「青春の故郷」を想起した詩であり、ミツキエヴィチ以降のポーランド文学の伝統を忠実に引き継いだ作品だと言うこともできます。しかし、ポロネーズのメロディが奏でられ、ウクライナの農民とユダヤ人がポーランド人とともに歌い躍る場面で幕を閉じる『パン・タデウシュ』とは異なって、「メランコリア」の後半部分には、ウクライナの住人たちに対する距離感が表明されています。

善良な人々よ、お前たちからはもう何も期待すまい
かつてのように今も私はお前たちを愛している。しかし私は知っている、お前たちはそうではないことを、
そして、おまえは、もう二度と見出すことのできない奇跡だったことも知っている、
私たちはあれほどに無垢であったと、そう思わせた、あの憂鬱な思考よ⁹⁾。

「メランコリア」が描くのは、故郷に対する過去と現在のイメージの落差であり、青春時代に抱いていた「無垢」なイメージの崩壊です。おそらく、ウクライナにおけるポーランド人の支配力がまだ強かった、ポーランド分割直後のミツキエヴィチの時代には、まだユートピア的な土地として「クレスイ」を描くことはポーランド人に許されたとしても、ロシア化が進み、ウクライナのナショナリズムが高まっていた、イヴァシュキエヴィチの時代に、そのような「クレスイ」を描くことは考えられないことでした。後年に発表した回想録のなかで、イヴァシュキエヴィチは次のように述べています。

1917年から18年にかけてのカタストロフは、生活能力の欠如した階級に対する
クー・ド・グラーズ
とどめの一撃にすぎなかった。ウクライナにおけるポーランド文化は根のないあだ花に過ぎず、遅かれ早かれ枯れる運命だったのだ¹⁰⁾。

分割時代を通じて先細りしていったウクライナのポーランド社会は、第一次世界大戦によって完全に消滅しますが、その消滅後に、すでに存在しない過去の世界として、イヴァシュキエヴィチは故郷のウクライナを描きました。文学史家のチャホフスキは、イヴァシュキエヴィチを「最後の<ウクライナの>ポーランド詩人」(ostatni polski poeta „ukraiński”)¹¹⁾と呼びましたが、実際にイヴァシュキエヴィチは、ウクライナのポーランド社会を生きた最後の世代でもあったのです。

ワルシャワの「クレスイ文学」

しかし、国内はもとより独立以前に世界中に散らばっていたポーランド・ディアスポラが殺到した当時のワルシャワにおいて、イヴァシュキエヴィチのような作家は少なくともありませんでした。1932年にズビグニェフ・ウニウォフスキが出版した『雑居部屋』という小説には、主人公の同居人の一人として、ジャージャ(Dziadzia)という朝鮮半島出身のポーランド人が登場していますが、シベリア出身でウラジオストクの大学で学んだ後、1921年にワルシャワにやっ

てきたロシア語とポーランド語の二言語作家サリンスキ（Stanisław Maria Saliński）がそのモデルだとされています。

イヴァシュキェヴィチもそのメンバーとして関わっていたワルシャワの前衛詩グループ「スカマンデル」にも、シュルツと同じドロホーブリチ出身のカジミェシュ・ヴィエジンスキや、『リトアニアの夜啼鳥』（1936年刊）の著者である、ヴィルニユス出身のイワコヴィチュヴナなど、「クレスイ」出身者が多く参加していました。1920年代末に実施されたアンケートによれば、当時のワルシャワで活躍する作家の63パーセントが「クレスイ」出身者であったとされています¹²⁾。他にも、当時のワルシャワでもっとも重要な出版社にルーイ社がありますが、この出版社を立ち上げて、ゴンブローヴィチの『フェルディドゥルケ』やブルーノ・シュルツの『肉桂色の店』などの小説だけでなく、トマス・マンやプルーストの翻訳書の出版も手がけたのが、ミンスク近郊で生まれたポーランド語作家メルヒヨル・ヴァンコーヴィチでした。

仮にポーランド文学を「引揚げ文学」として読みなおしていくとすれば、イヴァシュキェヴィチだけでなく、まさに朴さんが『引揚げ文学論序説』のなかで日本文学を対象に行っておられるように、その活動の拠点でもあったワルシャワも含めた、第一次世界大戦以後の「クレスイ文学」を総体的に捉えていく作業が必要となります。しかも、ワルシャワは新生ポーランド国家の首都としてポーランド文学の中心でもありましたが、ヴィルノやニューヨークなどと並ぶイディッシュ文学の世界的な拠点のひとつでもあった点も無視することはできません。「引揚げ」や「撤収」してきた人々であふれ返っていた多言語的なワルシャワの文学を、日本の「引揚げ文学」における満洲や台湾などとも比べながら、いずれ考察していきたいと思っています。

注

- 1) Stanisław Uliasz, *Literatura Kresów*, Rzeszów, s.14.
- 2) Adam Walaszek (red.) *Polska diaspora*, Kraków, 2001, s. 275.
- 3) アダム・ミツキェヴィチ『パン・タデウシュ』工藤幸雄訳、講談社文芸文庫、17頁。
- 4) たとえば、2011年に『ヤロスワフ・イヴァシュキェヴィチとウクライナ』と題するポーランド語のアンソロジーがイヴァシュキェヴィチ博物館から刊行されている。
- 5) Jarosław Iwazkiewicz, *Książka moich wspomnień*. Kraków 1968, s. 182.
- 6) なお、本式に「引揚げ」が開始されるのは、さらに後のことです。1920年に勃発したポーランド・ソビエト戦争が終結し、両国の国交が正常化するリガ条約を経てようやく、ポーランドとソ連との間で捕虜の交換と住民の「引揚げ」が行われるようになります。それでも、ロシア内戦とポーランド・ソビエト戦争を生き延びて帰還できた者は少なく、ロシアからの住民の移動はもっぱら第一次世界大戦の最中での「撤収」として展開しました。
- 7) Jarosław Iwazkiewicz, *Hilary syn buchaltera*. Warszawa-Toruń-Siedlce 1923, s.119-120.
- 8) Jarosław Iwazkiewicz, *Książka moich wspomnień*. Kraków 1968, s. 219.
- 9) Jarosław Iwazkiewicz, *Dionizje*, Warszawa, 1922. s.31.
- 10) Jarosław Iwazkiewicz, *Książka moich wspomnień*. Kraków 1968, s. 233.
- 11) Kazimierz Czachowski, *Obraz Współczesnej Literatury Polskiej 1884-1934*. T. 3, Warszawa-Lwów 1936, s. 181.
- 12) Bolesław Hadaczek, *Historia Literatury Kresowej*, Kraków, 2011, s. 252

